

heisei16

六花

Rikukwa haikukai

8

晦日そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho
風 ohdako no orikite kusa no iro to naru
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryouyaku ni

designed by Asuka

訪
戴



山田六甲

滝瓢水の母の実家（三木湯ノ山街道）

炎昼の石に蒲団は掛けられず
脇川に冷やせと瓜の無人売
老鶯や水は拝んで飲みにけり
雁皮紙に墨置けば蝉しぐれかな
暑いねと言いながら通夜の席を辞す
蝸や句集を編むは誰のため

申年の梅干してをり真つ赤つか
こけ猿の壺ならずとも梅漬ける
ゑびすビール大黒さまに注ぎもらふ
炎昼の鯉を覗いて橋わたる
水中花われは逆子で生まれ来し
浴衣着てタイムスリップしませんか
炎天に暖房が利き出す車

七月十一日西村咲子さん

蝉生まれその日に神は召されしと

へだて

中 村 房 江

赤んぼをただ笑はせて日の盛り
蝉の穴ながめて思ひ封じたる
することがなくて爪切る瓜の花
白扇子開きて人をへだてたる
盛られたる蕎麦の黒さよ秋はじめ

原爆忌

松 山 律 子

梅雨明けてコピー用紙が滑り出す
生きておればきつとあしたも蝉は鳴く
茄子の馬つつと動いて日の陰に
夜盗虫パスワードだけは見せられない
原爆忌何時かは忘れられるのか

つくし野

二 瓶 洋 子

双 蝶 の 別 れ 俄 に 空 の あ を
つ く し 野 に 移 動 図 書 館 来 て 止 ま る
銀 翼 の み る み る 点 に 花 の 雲
鶯 や 起 き む と す れ ば 声 の 止 む
新 緑 や 自 惚 れ 鏡 古 び た る

桜人

鳴 海 清 美

鰐 口 の 一 打 一 打 へ 桜 花
本 尊 へ 片 道 百 歩 桜 人
駅 の 名 は 日^ひ 当^あ たり^り と あり 花 の 雲
麦 青 む 中 山 道 を 真 ん 中 に
竹 秋 や 今 浦 島 と な つ て を り

風鈴を買ふ風鈴の風の中

木内美保子

降ろされて温き息吐く鯉のぼり

ほつほつと湧く石清水掌に

小さき夢ころろ落ちるゆすら梅

そつぽ向き話に乗らぬ百合の花

ふつう文章なら、「風鈴の音の中」と書くと思うが、俳句的な表現をしたからこのように言ったのだ。

音は自ずと読者が、この作品の中にあふれる風鈴の音を思い浮かべるのである。その音色は読者によって様々な材質の音色になるはずだ。たくさん吊られた中の一つを選んでいる真剣な眼と聞き分けるその耳と少女のみずみずしい横顔を思い起こそう。

さくらんぼつぶせば指の潰れけり 永田 勇

鯉のぼり雲を呑み込み泳ぎけり

泥田から湧き出でたるや蝌蚪の群れ

嘘つきてうつむく妻や蝸牛

夏帽子忘れて買ひに走りけり

六花には何をして食べて（生活して）いるのかよくわからない人たちが（私を含めて）少なくとも五人はいる。永田さんもその一人である。かといって俳句ばかり詠んでいるかというところでもなく。だからといって俳句を作りに行こうと誘えばほとんど行動を共にする人なのだ。その成果が掲句であり「嘘つきてうつむく妻や」の句。今月号は二人も夢風撰巻頭に推薦してしまった。

橙木集

すべり台

松下 幸恵

聖五月海賊の手のすべり台

風光る泣く児笑ふ子動物園

その身より大きな荷をもつ春の蟻

風薫る双児のベビーカー出迎へり

楠若葉鼻すぢとほる転校生

以下五十首順送り

花殻

水谷ひさ江

遊び紙

市川伊團次

朝夕に花殻つんで夏さかん

窓開けて祇園囃子の片泊り

釣書かく墨なめらかや天の川

五位鷺の植田の水を治めをり

一匹の蠅に夕餉の味失せし

明暗や谷の中より時鳥

赤錆の鎖そのまま薔薇の庭

遊び男^をの遊び疲れて薔薇の庭

薔薇の香をしかと受けとめ飯を食ふ

遊び紙直筆の句に薄暑かな

六花集

永田 勇

会員自選

鯉のぼり雲を呑み込み泳ぎけり
泥田より湧き出でたるや蝌蚪の群れ
さくらんぼつぶせば指の潰れけり
嘘つきてうつむく妻や蝸牛
夏帽子忘れて買ひに走りけり

林 裕美子

中谷喜美子

心半分持つていかれし五月闇
鍋で炊くごはん甘うて夏に入る
掌に茶碗包みて豆ごはん
訃報くる洗面台蟻横切りて
君が背を頼りに進む夏の山

手の内にあるとも知らず春蚊鳴く
表から見れば寺なり幟立つ
老鶯や通りすがりに湧水みず汲んで
焼酎の銘柄に酔ふ麦の秋
走梅雨額いつぱいに鯉泳ぐ

菜根譚



六甲

心半分持つていかれし五月闇

林 裕美子

五月闇とは五月雨が降る頃の夜が暗いことで、今で言えば梅雨時の夜のことである。

掲句、心の片隅をある悩みが占めていて、何をするにも全面的に集中できない状態なのだ。そのことを「心半分持つていかれ」と巧みに表現した。

もしかしたら、心を持ち去った人知の及ばない存在をも作者は感じているのかもしれない。

友禅の柄そのままに花嵐

田尻 勝子

花（桜）に友禅とはそれだけだったら、まさに絵に描いたような平凡な取り合わせ表現形式のだが、作者がいま目の当たりにしているのは「友禅の柄そのまま」という喩えをすることによって取り合わせの平凡さが消え、感動をよりよく読者に伝えることが出来たのである。

走り梅雨額いつばいに鯉泳ぎ

中谷喜美子

「走り梅雨」は梅雨入りする前の梅雨を思わせる天

気で、梅雨の走りのこ遠。

絵の中の鯉の構図は掲句のとおり額いっぱい泳ぐさまであり、まさに水を得た魚のように生き生きと絵も句も描写してあるのだ。この句の佳いところは「額いっぱい」と表現したところにある。(以下略)